

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成29(2017)年
10月号
通巻566号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成29年10月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



秋の大和民俗公園にて 大和郡山市 みんなの広場「らんまん」 松下広実さん絵

平成元年(1989年)4月2日 「藤の木の話を聞く会」講演より

神武東遷の聖蹟顕彰運動の話 (上)

於：藤之木公民館

法主 矢追日聖 (満77歳)

郷土の歴史の勉強をしている地元グループが、「藤の木」を取り上げて、土地の古老である「矢追先生」に「金鶏彦祥・鳥見山中の靈時」などの話をしてほしいと依頼してこられた時の録音が残っていました。法話として話されるのとはまた違う味わいがあります。(編集部)

矢追隆家という名前



私は終戦後、大倭教という宗教をやるようになって矢追日聖という名前に変わっておりますけれど、それまでは隆家^{たかや}でした。今でも昔馴染みから隆家さん、隆家さんと出ますけれども、やっぱり藤の木の生え抜きやしね、気持ちは昔のままで親しみを持ってますから、それも嬉しいです。私もエーダハン、エーダハンと言いますけれどね、これは亡くなった岸田栄三郎さんのことで、竹馬の友や。今でも兄弟みたいに思ってますねん。
ここへは昔のことを殆ど知らない若い人や他所から嫁いだ方がお出でになっていいると思えます。ここに矢追隆家と書いてあったら親しみがあつたかもしれませんが、まあ一つこの白い髭を覚えてお

て下さい。

紀元二六〇〇年記念という行事

学校におりました時は、史学が専門でございまして。史学の中でも、今流行っておりますけれど考古学ですね、古代文化というようなものを六年間専攻しておったんです。

そんなところから、今、司会者がおっしゃって「いた紀元二六〇〇年記念行事の時、『金鶏の黎明』という本を出しましてね。」

どういふことかと言うと、昭和十五年は、神武天皇が第一代の天皇として即位してから二六〇〇年に当たるといふわけです。だから日本の国家的行事として、神武天皇が九州の日向から大和へ移って来た時に何かあった場所、それを聖蹟として顕彰するという建前なんです。

昭和十二年頃にそういう話を聞いておりました。けれども史学の科学的な立場からでは、神武天皇なんか居らなかったというのが定説になっていたんです。そういう架空の人物をつかまえて、どこに聖蹟を決めるのか、当時の学者の間では非常に困っておった問題なんです。

ところが国をあげて天皇陛下は現人神あらひとがみであるという時代でね、あんな達が想像もつかへんようなことがよくあったんです。例えば電車の中で「天皇陛下でも小便するんやろなあ」と一言言ったら、皇室不敬罪で「ちよつと来い」と引つ張っていかれてしまう。そのぐらい天皇というのには生き神であつたんです。だから天皇陛下が行幸になるといふのでお出迎えに行つたかてね、皆頭を下げておつて、行つてしまつた後で頭を上げるから、天皇陛下の顔なんか見たことないんですよ。中国での戦争がだんだん大きくなってきて、大

陸に兵隊を残さんならんかった。その一番頂上が天皇陛下であるとせんなん、そういうような時代であつたと思います。

『日本書紀』を根拠にする

その時の聖蹟顕彰の責任者が東京帝国大学の黒板博士だつたんです(※当時は名誉教授、名前は勝美)。私も東京で会いましたけど、「本当の日本の歴史として認めるんやったら、崇神天皇ぐらいいかな」なんて、ぶつちやけた話をするんやね。学者自身がそんな状態や。私が「富雄に聖蹟があります」と言うたつて「まあええやん」と笑つてはるいふ感じやつたんですよ。

それで学者達は難儀しておつたんやけれども、その当時は、天皇陛下は歴史というより一つの信仰やつたからね。国は何とかせよというし、それなら何か基準を決めてほしいというふうなことで、『日本書紀』に書いてある範囲において聖蹟を決めていけというのが国の方針になつたんです。

『古事記』・『日本書紀』というのは、今から千三百年ほど昔に、奈良朝初め頃、元明・元正天皇の時に出来ておるんです。一番最初に、昔から言い伝えてきたものを記録したのは聖徳太子や蘇我馬子なんです。聖徳太子は勉強されておるし文字もよくお分かりの方でした。ところがその記録は、蘇我入鹿の乱の時、焼けてしまつたんです。だから残つたものを寄せ集めて出来上がったのが『日本書紀』であり『古事記』なんです。

語り部というのが居つてね、千年以上も前から言い伝えてきたものを記録したわけです。あんな達でも十年前の言い伝えが、今になると訳が分からんことも沢山あると思うんです。それが千年

から昔のことを記録するんやからね、物語は伝わっているけれども、どこまで本当やら分らないし、実年代というものは全然分らない。

特にその時は、中国や百済から来ている人達が文章を作つたんです。中国には歴史がきちんと残つていたから、その年の千十二支(※例えば平成二十九年は丁酉のとりになる)も分かります。それを遡つて日本の言い伝えを合わせるようにして年を決めていったわけです。そうしますと、神武天皇まで行くと二六〇〇年になるというんやけれども、千十二支を一つ繰りそなつたんか日本の歴史は六百年長いんですよ。だから百二、三十歳とか百四十歳とか生きたことになつてる天皇も居ります。そうせんと話が合わないんです。

まあ、そんなんで出来ておる『日本書紀』やけれども、それが伝説であつても架空のものであつても一応それを歴史として認めて、それを根拠にして学者はその通りにやつたわけです。だから面白いことがあつたんです。九州の日向の人達が生駒の西から大和へ入ろうとして戦さをしたのが、『古事記』では日下と書いてある。『日本書紀』の方は、草香くさかなら分かるけど(※草香邑と書かれた個所あり)、万葉仮名で「孔舎衛」と書いてある。「衛」は「衛」の写し間違えなんです。そういうことが学者は分かつておつたとしても「孔舎衛」のままね、駅の名も「孔舎衛坂駅」になつたと、それぐらいな調査の仕方であつたんです。

藤の木を中心にして顕彰運動

で、それに対して昭和十二年頃から、ここの「藤の木」を中心として私が、烽火のびをあげたようなことになつたんです。

結局、古代の言い伝えでしょ、古代の言い伝え

なんかに歴史的根拠があったら不思議なんです、無いもんでいいんです。

これは歴史的立場から言いますと、伝承学という学問になるんです。伝承学の基本というものは、土地の名前や、灯籠等の石(※や金属)に書いてある金石文とか、あるいはお年寄りから聞いた昔からの口碑・伝説とかを資料として、それで科学的にものを考えていく行き方なんです。

書いたものがあつたら証拠だと人は言います。歴史の世界では、例えば日記が一等資料になります。けれども、ただ書いたものだけでは証拠にはならないんですよ。それはね、一番身近なところでは、あんた達が毎日、日記を書くとか仮定すると、自分の都合の悪いところは減多に書いてないと思うんです。他の人の悪いところは書くかもしれないけれど、自分自身の内緒にしたいような、秘密にするようなことは書いてないはずなんです。だから一等資料でも、必ずしも証拠にはならないんですよ。

このような態度で歴史を見れば、二六〇〇年昔の神武天皇の話になってきたら、もう何も根拠が無いんです。『日本書紀』では、金の鶏が飛んできて神武天皇の弓の先にとまって、その光が眩しかったからナガスネヒコ(※法主様はナガソネヒコと言われる。この後はナガソネヒコで統一)の方は戦さができなくなつたと書いているんですね。そんなもん荒唐無稽な話ですよ。

だから私は、ここが金鶏発祥の地だと言うてるけれども、そんなん嘘なんです。ここからだけやない、金の鶏なんて日本中どこからも出てへん。正直に言うたらそうなんだけれども、太陽の光が輝いたのやら、あるいは雷が落ちたんやら、何かがあつたということは言えるんじゃないかと思いません。そういう昔からの言い伝えというものは、

そこに住んでいる者は信じたい、信じるというだけなんです。理屈やないんです。

その当時、私も神武天皇のことについては一応研究もしました。神武天皇は九州から始まって、熊野へ回り、そして大和の裏からこちちに入ってきてるんやから、伝説地というのは色々たくさんあるんですよ。しかし、富雄のことを言う人はおらなかった、私が初めてなんです。藤の木のことを中心にして私一人が言い出したんです。

その時、奈良県で一番やかましく言つてたのは、桜井なんです。桜井に鳥見という所があつて、鳥見神社というお宮さんもあるんです。久米邦武博士という明治時代の有名な歴史家がおりましたね、『金鶏の光』という単行本を出しています。それは桜井説なんです。明治四十三年に出している本やからね、桜井はもうその頃から顕彰運動をやつとつたんです。

それから宇陀の榛原という所に鳥見山があつて、そこも「鳥見山中靈時」だ、金鶏発祥だとか一生懸命、運動をしておつたんです。女学校の先生やとか県会議員が東京の方へ行つて政治的な動きもしてね。私も東京へ行つて、その筋に交渉しているんだから、そういう動きもたまたま分かつてました。

そこでもって桜井と宇陀と私とで、何べんか論争してますよ。

それが歴史的にややくいとしても、いわゆる伝説であつてもかまわない、とにかく何かの聖蹟を北の方へ持って来たいというのが私の念願で、旗揚げしたんです。

鳥見谷という地形から見る

決定する立場の学者達と東京で、話し合ひもし

ているんですよ。一番親密に話ができたのは国学院大学の太場磐雄博士で、神社考古学の大家なの。その先生が「これは地形からいかなないかんよ」と言われたんです。それで富雄の谷筋を全部図面に書いて説明するようにしたんです。

日面ひつむで後ろを山が囲んでおるような場所でない、古代人は神祀りをする場にしないんです。地形からいきますと、二名から斑鳩、法隆寺までが全部鳥見谷なんです、この鳥見谷の筋の中では、藤の木が一番良い場所なんです。昔は東山中对して、鳥見谷、生駒谷、平群谷、これを西山中と言つてたんですよ。最近では西山中という言葉は皆忘れてますわ、私は記録を見て言うんやけどね。鳥見谷の筋には、「トミ」という地名が多いんです。

藤の木は、昔から「鳩の峰」と言うんですね。京都の男山の石清水八幡宮に行つても鳩の峰と言うんですが、八幡さんには鳩が付き物でそういうのかなと思う。けれども藤の木の場合は、「鶏」という文字は読めないことが多いし、「至」をくずすと「九」みたいになって、「鳩」になつてしまつた、そんな誤りがあつたという見方もできるかもしれない、と。それで土地の古い人の話を聞きました。家へ遊びに行つて一緒に話をしたり、あつちこち現場に連れて歩いてもらつたりしたことを覚えてるんです。その時に、「鶏」が「鳩」になつたのかもしらんなと聞いたら、「うん、そうかもしれんな」と言つてました。

霊山寺の山も鳥見山なんです。北倭の方に上れば王隆寺のあるところトミ山だし、そこに鶏神社というのがあるし、とにかくこの谷筋にはトミとかトビとかいいう名称がつく所が、あつちにもこつちにもあるんです。(続く)

2017年6月24日 於：大阪YMCA国際文化センター
FIWC関西委員会主催 ハンセン病フォーラム

それでも人生にイエス、

—ハンセン病の終末を迎え、入所者の皆さんと考える

特別ゲスト
樹木希林



日本のハンセン病の歴史は、国民の努力による解決という方法を取らず、時が過ぎ去ることによる消滅、という方法で幕を閉じようとしているように思われます。平均年齢85歳となった元患者さんたちは今、何を思っておられるのか。その言葉に耳をすまし、改めて、私たちの前に置きざりにされている問題について、考え合いたいと思います。(フォーラムのちらいより)

そのような趣旨で開催されたフォーラムについて『むすび便り』第38号(NPO法人むすびの家発行)より転載させて頂きました。(編集部)

〔当日のパンフレットから〕

消えてゆく言葉を扱う

徳 永 進

人に気持ちなんか聞いてはいけません。黙して察する以外に何があるのか。心の奥にある深いことごと、聞いてはいけません。なのに、聞こうとした。おろか者だ。気配を察する力が貧弱だから、国家による強制があり、コミュニティーの無関心が根強くあるからと弁解してみる。今聞かなければ、聞く機会は永遠に失われてしまう、という気持ちもあった。日本のハンセン病療養所で長年を通じた人たちの気持ち、のこと。

1996年「らい予防法廃止記念フォーラム」(※FIWC関西主催、鶴見俊輔や筑紫哲也も講演した)が大坂で開かれたころ、入所者数は減少のさ中であって、でも約5500人が全国の療養



所で暮らしておられた。2017年、入所者数は1500人を割った。日本のハンセン病は終焉期を迎えている。らい詩人集団の島田等さん(故人)が「私たちは2025年、日本から消滅します」と言っていたことを思い出す。解決ではなく消滅という形で終わる、と。それでいいののか。おせっかいと承知で、今、療養所で暮らしておられる方々は、どんな気持ちを感じておられるのか、まずこのことを聞きたい、と思った。断られ、拒まれることを覚悟で聞かせてもらえたら、と思った。実行した。今回の「ハンセン病フォーラム」ではその声に耳をすましたい、と思った。聞きたかった。

長年、療養所へ放置し、故郷への奪還に血まなこにならなかつた者たちへ語る言葉はない!その者たちに聞く資格はなからう!と叱責を受けるのは覚悟。多くを語らない方たち、無言の方たちの中にある言葉を、私たちは自分自身からも遠ざかり消えようとしている言葉と共に、もう一度、心をこめて掬い取らねばならないのではないのか。(今回のフォーラムの呼びかけ人/1968年、FIWC関西委員会/鳥取市にある「野の花診療所」の医師)

〔フォーラムを終えて〕

はて、これから何しよう

徳 永 進

壇上って難しい。つい、主義や主張を語ってしまいがちになる。ほんとは、ハンセン病史の終焉を迎えて、①辛かったこと ②うれしかったこと ③ひとこと終焉に向かつて言い残したいこと、の3つを語ってもらえたらと思っていたのだが、打ち合わせもままならず、そうはならなかった。神谷文義さんが「交流の家」に囲碁将棋大会でやってきた48年前、「自分らは嫌われるもんと思っていたのに、嫌わんもんもいるのだと知って、びっくりしたわ」とおっしゃっていたのだが、そんな発言をうまく汲み出せなく、残念。

でも会場に集まって下さった市民が多くいたことには気を強くして改めて療養所に入所されている人たちの気持ちを、井戸のように汲んで届ける役の人が要るんだな、と思いましたね。

アンケートはがきの返送率が高かったのには感謝でした。50枚は返ってきて欲しいと思っていたくらいですから、493枚はありがたかった。印象に残っていたことを「Web r o n z a」に書かせてもらっています。「今の気持ち」で一番多かった「差別許せない」が285人、二番が「ありがとう」の213人でした。112名の人がこの両方に○印を付けておられた。相反する言葉が共に在ることに胸を衝かれる。

今後自分たちに何ができるか、と自問する。「交流の家」が続けてきたように、つながりを持って人たちと変わらぬ交流をすることだろう。それは皆さんにお願いしたいことかも知れない。さてはて私は? 今目にする自治会の機関誌が『菊池野』と『愛生』の2誌なので、もう少し欲

張りになって、北から南までの他の療養所のいくつかの機関誌を読ませてもらうようにしたい。ただ、忙しさにかまけて実現するかどうか。あつ、忘れるところだった。FIWCは元々祭り好き。集まってお酒を飲み語り合うと、いい仲間がいたな、と懐かしさ覚ええましたね。^い錚錚社会からの脱出、これはキャンペーン皆の求めること、と思いますね。

▼ハンセン病関連退所者原告団いちようの会
員・山本美恵子さんの感想(談)―要約抜粋―

ちらしには「改めて、私たちの前に置き去りにされている問題について考え合いたい」ってありましたね。でもそういう話にはならなかった。

普通の人は詳しいことは知らなくても、つらい目にあつたんだろなあって漠然とした思いは持っているだろうから、結論として「自分の人生にイエスだ」って声を聞いたらほっとするんじゃないかな。でも、それだけの問題じゃないんだってことも、ハンセン病のフォーラムなどから、きちんと言うてもらいたかった。

国の力で強制収容して、一度入つたららい予防法が廃止されるまで病気が治つても帰れなかった。文字通り人生を取り返しのできないものになつてしまった。そういう問題までイエスという結論では困る。個人の話として「良かった」と肯定するのはいいけれど、今が良いんだからもういいんじゃないかという話で終わらせないでほしい。国の問題だけじゃない、一般社会だつて呼応してたということですよ。誰も不思議に思わずに自分たち自身も当たり前だと受け入れて我慢してきた。そこをちゃんと考えて、世の中に足場として残しとかないといけない。そうでなかったら、これからも同じような犠牲者が出ると思う。

平成29年度大倭会文化講演会

(協賛 交流の家・NPO法人むすびの家)

ハンセン病の真実を追い続けて

—35年以上にわたる報道カメラマンとしての取材から—

日 時：平成 29 年 11 月 11 日 (土) 午後 2 時～

場 所：大倭拝殿

入場無料

講 師：宮崎 賢 (みやざき けん) 氏



講師プロフィール

- テレビ報道カメラマン。1953年岡山県生まれ。35年以上にわたり、長島愛生園・邑久光明園をはじめ全国13か所中、10か所の国立ハンセン病療養所のほか、ライ菌の発見者であるハンセン医師の生まれたノルウェーや、またインド等、世界のハンセン病政策や現状も取材。
- これまでにハンセン病ドキュメンタリー12番組、ニュース特集120本の撮影・編集。第54回ギャラクシー賞奨励賞、第43回放送文化基金賞・放送文化個人賞をはじめとして、いくつもの放送賞を受賞している。
- 当日は講演の中で宮崎氏の作品を上映します。
(講演会終了後、講師を囲んでの懇親会を行います。懇親会会費：夕食付1500円)

2017年7月15日東京新聞「この人欄」より

「同じ人間として、望まない人生を送らされた不条理を伝えねば」。ハンセン病問題を追い続け、放送文化基金賞を受賞した。

1982年夏、瀬戸内海の島の療養所をはじめて訪れた。本土への架橋を目指す入所者の取材だった。同僚でも「汚い病気」と偏見を隠さない時代。最初は足がすくんだが、「島流しを一日も早く終わらせてほしい」との叫びが胸に突き刺さった。2か月後に再訪。交渉の末、入所者1300人のうち数人が撮影に応じたが、顔を出したのは一人だけ。大々的に建設が進む瀬戸大橋と対比したドキュメンタリーにまとめた。(後略)

シリーズ

大倭への道・大倭からの道

高知県高岡郡佐川町

氏次 麻理

大倭の皆様、お変わりはありませんでしょうか。氏次(旧姓・青木)麻理と申します。

私は、大学卒業直前に阪神大震災でF I W C関西委員会のワークキャンプに参加後、ご縁をいただいて広島より交流の家に、そして長曽根寮にて約5年間、寮母としてお世話になりました。その間、ワークキャンプの友人の繋がりで今の主人と出会い、現在は、高知県高岡郡佐川町に住んでいます。

高知は西に東に長い県ですが、佐川町は、ほぼ中央に位置し、高知市内より車にて1時間弱、西進した距離にある中山間地です。日本酒が好きな方であれば、司牡丹の酒造元とお伝えしたらよろしいでしょうか。

私の嫁ぎ先である氏次という姓は高知でも珍しく、全国でも百人弱であると聞いてます。もともとは、愛媛県の県境に近い吾川郡仁淀川町池川の出身で、平家の落人の流れがあるそうです。こちらはまだ、「仁淀ブルー」と名付けられた本当に澄んだ青い清らかな川が流れており、おいしい茶葉の生産と林業が主要産業の町です。なかなか通常の観光ルートでは通らない地域ではございますが、是非高知においでする機会があれば、少し足を延ばしていただけたらと思います。

私が高知に嫁いだ後は、程なくして義父母が経営をしていたコンビニエンスストアを手伝うことになりました。地域で初めてコンビニエンスストアを始めた店舗ではありませんが、幹線沿いに競合店が建ち始め、我が家も他チェーンへの看板替えの選択が迫られる状況の時に関わることになり

ました。義父母も経営の一線から引きたい思いのなか、私はまだ慣れない土地で、長男を身ごもった身体でしたので、主人だけを頼りにがむしやりに過ごしたように思います。結局、長男が1歳にならない前に看板替え、新店舗準備のため、名古屋での本部研修、数年後に自店舗は閉店。高知市内の本部直営店にて雇われ店長・副店長として夫婦で勤務、またそこも本部の意向で閉店というコンビニ業界によくある形で終わることになりました。

平成13年に長男・祝詞を出産し、翌年、長女・美湖都を授かりました。

息子の出産前は、切迫流産で入院しなくてはいけないこともありましたが、娘の場合は、出産直前までほぼ順調に経過しました。ただ、陣痛が始まり、産婦人科で出産の準備を整えていきましたが、子宮口に顔を向けた顔面位が改善せず、慌てて帝王切開に切り替え準備をするなか、自然分娩で出てきました。顔面が圧迫される状況が続いていた為、顔色は黒く腫れていたこと、両足が足首からほぼ真横に内側に入った内反足であること、その画像的な様子が今は頭に残っています。

退院後は、療育福祉センターにて診察、手術等があり、また日々成長していくなかで何かの違和感を感じ、小児科で相談をしました。医師は、赤ちゃんにはそれぞれの個性があるとのこと、私の違和感をすぐには受け入れてはいただけませんでした。大、脳梁欠損等の障害があることがわかりました。前述したように24時間営業の環境のあるなか、

定期的な通院が始まり、車を運転しながら自然に涙が流れてくる、子供の前で子守唄も口ずさめない自分になっていました。

娘は、本当にお人形さんのように無表情だったのですが、ある時、長男の通う保育園の行事で少し親元から離れ、保育士さんや他の子供たちと共に過ごす機会がありました。その際、娘が周りに興味を示す様子があったと伺い、保育園への通園の決心に繋がりました。

娘は、離乳食のようなものは全て口に含むことを嫌がり、哺乳瓶でのミルクのみ安心して口に含んでくれる状況でしたが、入園を機会にどんな色々な可能性が広がっていきました。現在は、高知市内の肢体不自由の子が集まる養護学校へ、通学バスで通っています。

私はコンビニエンスストアとの関わりが終わった後は、職業訓練でパソコンを学び、ハローワークの相談員として約7年勤務、そして昨年の春より(公益財団法人)介護労働安定センターにて能力開発アドバイザーとして勤務しております。

義父母の高齢に伴う入院や通院介助、娘の卒業後の居場所やショートステイ先の確保準備の取り組みを急がなくてはいけない状況であること、息子も少し悩んでいる状況があるのに向き合えていないことなど、色々重なる状況に、私も年齢を重ねたためか、今は少し息切れを感じています。

主人も同じような気持ちであるようで、夫婦それぞれが常に時間に追われ、心に余裕がない生活を続けていても良いのだろうか、これから先の生活のあり方を考える時期がきているのではと話をしているところです。

広島から少し飛び出した形で奈良でお世話になり、それから今まで色々な人と出会い、繋がりが、助けていただいた事が沢山ありました。そして今

も沢山気にかけてくださる方がいらつしやいます。それゆえ気持ちがいそいそと感じている今も、あまり般に閉じ込まらないよう、そして新鮮な空気を感じられるよう、人と出会っていききたいなと思っています。

この度、近況報告の原稿依頼を受け、本当はもう少し元気な様子をお伝えしたかったのですが、『おやまと』の原稿ということで、このような少し元気がない私も受け止めてくださるかなど、拙い文章となりすみません。

「森のイスキア」主宰

佐藤初女さんの思い出

あと
足あと

青森市 高橋 末子

2004(平成16)年度当時、私が勤務していた藤崎園芸高校が、青森県高等学校PTA連合会母親委員会の事務局校でした。担当校渉外主任として佐藤初女さんのご自宅へ研修会の講師にと依頼に行きました。

その時の思い出が2つあります。

1つはなぜ佐藤初女さんを選んだかということ。有名人だからではありません。自分の卒業した高校の先輩であるので、依頼するのにも少し気が楽ではありましたが。

七戸高校勤務時代に、教員住宅に私を訪ねて来られた40歳代の男性がいらつしやいました。確か四国の方で、結婚について悩んでいることを話しておられました。私はただただ聞いていました。お帰りになる時、一冊の本を、「読んで下さい」と置いていきました。その本が佐藤初女さんのことを書いたもので、題名を忘れましたが、何か死を待つ人の……というような内容に、私は感動し

たからです。

初女さんは、「森のイスキアのことを話したらよろしいのですか？」と言われたので、「いいえ、ちがいます。今の高校生の親は、子育ての悩みをかかえつつ一生懸命生きています。死を見つめることは、生きることを見つめることです。どうか、子どもどう関わっていいか分からないお母さん達に大事なことは何なのか、時間のゆるす限りお話しして下さい」とお願いしました。初女さんは、その本に自分がモデルになって書かれていることをごぞんじなかつたようです。

2つ目は、初女さんを通して、人をまとめる力を学習させていただきました。

研修会に対する、私の思い、学校の思い、参加を希望している保護者の方の思い、それぞれの思いを受入れたのですが限界があります。

怒りたくなる気持ちを初女さんに相談することがあり、その度、初女さんの助言で救われました。

その後、青森県高P連広報紙『つながり』62号に、私は次のような報告文を書きました。

へ(略) 十月五日弘前パークホテルを会場にして三百六十名が参加し(略)、岩木山麓にて「森のイスキア」を主宰され、地道な活動を続けておられる佐藤初女氏から『大地の温もり、母の心』をテーマにご講演を戴きました。

「訪ねてくる方と一緒に食事をしながら、その人が『おいしい』と感じた時に心の扉が徐々に開き、話しているうちにその人が自分で自分の道を発見したり、気づいたりします。自分で気づいたことは納得してきますので、すぐに行動に移りやすい……」とご自身の活動を穏やかに語る佐藤初女氏は、「お母さんを求めているひとが多い」「お母さんに受けとめられていない」「お母さんに話を聞いてもらっていない」「小さい時にお母さんから抱きしめてもらっていない」と、体験された最近の事例を語り、

「家庭が全ての中心であるので、家庭がうまくいってないと子供がどんなに苦しんでいるか……」「お母さんというのは大きな存在であり、温かさである……」

「お父さんもお母さんと一緒に子育てをしなければならぬ。お母さんがただ優しいからいいという訳ではない。ある時は『女性』性の優しさだけでなく、『男性』性の力強いところもお母さんになければだめですし、お父さんもまた強さだけでなく女性のような温かさや優しさがなければいけない……」

「良いこと、悪いことははっきりしなければだめだし……識別する心も育てなければいけない……」「言葉を超えた行動が心に響く」「心で受け容れられるということ信頼される……」

「自分の心をすっきり空にして、無にした気持ちで相手のことを聴く……最後まで聴いていると自然にその人が答えを出してくる」「三度の食事を正しく摂ることによって内が強まってくるし、内が強まってくると考えも正常になるし健康的になる……」

と事例を交えながら語られました。

また、「すべてにいのちがある」「最後までめんどくさがらない」「太陽の暖かさにも似る優しい言葉、冬の厳しい寒さにも値する愛情ある助言、和やかな風を思わせるような雰囲気」「伝える時にも、言葉も工夫して、タイミングを見て、さりげなく、くどくなく、あっさり」とも強調されておられました。(略)

※佐藤初女さん…1921年10月3日
2016年2月1日、満94歳

あじさい日記

9月12日 甲野善紀さんの紹介で高秋明子さん(大阪府八尾市)が来邑され、物部守屋について杉本順一さんと歓談。

9月15日 大倭神宮月次祭。

9月16日 午後、交流の家でF IWC定例委員会。

9月18日 東方の碑の花畑、東角にある桜の古木のスズメバチの巣を駆除して頂きました。

9月22日 「昇ちゃんハウス」(故中村昇次さんの家)の改修工事が終わり、大倭殖産(株)から引継ぎを受けました。

9月23日 大倭大本宮月次祭。この日は平成5年9月23日の法話をお聞きしました。平成27年9月号『おおよまと』に「お彼岸さん」として掲載分。

玄徳院を訪ねて来られた東京の尾藤恵美子・めい海さん母子が大倭会館泊。大倭神宮や邑内各所も巡られました。26日。

9月29日 北海道小樽市の本紙編集部員である守谷明宏さんが来邑、交流の家泊。夜は地元元の編集に関わるメンバーが集合して夕食会をしました。

後日、守谷さんのメール「今回、成謙坊さんと東山坊さんに初めてご挨拶させてもらい嬉しく思っています。また太郎坊さん、次郎坊さんもお会いするのは2006年以来ですね。実は、

ずっと記憶していたイメージとちよつと違っていました。一度確かめたかったです」。

大倭墓地にも足を延ばし墓石を詳しく見て回り、蚊の歓迎を受けておられました。

9月30日 地元の富雄南小学校の運動会。紫陽花邑関係の杉本順誠君、中村哉仁君らもがんばりました。

10月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

10月8日 大倭町自治会のバス旅行。三重県の関宿、伊賀流忍者博物館、芭蕉翁記念館等へ。拝殿において祝会。最近、坂田洋美さんは花柳鶴寿賀さん(奄美大島在住)の一行と九州方面にアマミ舞奉納の旅をしたとのことで、アマミ舞を舞ってくれました。

大倭安宿苑では(菅原園)

9月25日 6名が昼食にお寿司や中華料理を出勤注文。

9月23日 14名が大倭墓地へ物語り墓参に行きました。(長曾根寮)

9月17日 (特養) 敬老の集いで女性はお化粧して、男性にも好評でした。

9月18日 (テイ) お祝い膳とボランティアさんのフラダンスで敬老会をしました。(茂毛路園)

9月23日 近隣の自治会やボラ

ンティアの方々、ご家族を迎えての地域交流会。食事と毎年恒例の職員の女装や歌、ダンスの出し物を楽しみました。(八重垣園)

9月23日 茂毛路園の地域交流会に2名がおよばれました。

あんない

*月次祭(大倭神宮)

11月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第586回祝会

11月11日(土) 文化講演会として行われます。詳細は5頁をご覧ください。

*月次祭(大倭神宮)

11月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)

11月23日(祝) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記

▼昭和41年1月23日発行の『すさのお』第1号から、途中で『おおよまと』という紙名になりました。

今月号までで通巻566号になります。それが、拝殿下の倉庫に整理されています。途中休刊の時期もありましたが、約50年分です。

他に昭和39く43年頃発行されたタブロイド版『大倭新聞』や雑誌『大倭』も残されています。古くは昭和23く32年頃に発行さ

れていた新聞『大倭』も整理中です。やはり保存のためには今のところ紙媒体が安定しているのかもしれない。

この夏、棚が一つ増やされ、物置き状態だった周辺もできるだけ片付け、閲覧机になるようなものも一応置きました。

▼思い返すと、ひどい湿気のためには拝殿下倉庫は物置きには不向きだったし、新聞も痛みが進んでいました。そこで平成11年秋、世話役に「せわやき」とふりがなして湯浅晴子さん達が、工業用除湿機購入の募金に立ち上がってくれたのです。昨今でいうクラウドファンディングですね。目標50万円。しかし開電の社員だった湯浅芳郎さんから毎月の電気代が高つくとのアドバースがありました。

倭商の故中島康治さんの提案で内側に断熱工事を施し、除湿機は大型の家庭用ですますことにして、工事が終わったのは平成13年冬でした。2割ほど高くなったのですが、太っ腹の寄付もあり大倭会から応援も頂きました。

紙のためには乾きすぎでもいけない、湿度50%前後で適度という状態が維持されるようになり、夏は涼しい「穴場」です。お試しあれ。

▼なお録音の残っている法話は、デジタル化が進み、拝殿のテレビでいつでも聴いて頂けるようになっていきます。(春)

ここはかとなく
埼玉県熊谷市 得田 典子

(略) 周りに果実など何も無いのに柑橘系の香りがしたり、夜に本を読んでいると本の内容に関係なく突然タバコの香りがしたり、何か体を動かしている時に軍歌の「さきまとおれとは同期の桜……みごと散りましょ国の為」とを口ずさんだり(私的には大嫌いな内容ですが)、誰か私に何か伝えたいことがあるのだろうか? これまでこのような経験がないので、気になっています。(略)

熊谷に帰ってきて丸3年、(略) 自分なりに学んできたつもりなのですが、今は思っていることが煮詰まってきて固まっています。最近、朝、姿のない方々に挨拶している「喜びをもって」とか、「健やかに……な」とか私の心の中に言葉が湧いてくるのですが、その前後に香りや歌やらが出てきたのです。誰も関係なく、ただ私が思い込んでいるだけ?

今年の夏は不安定で心も体も落ち着きません。ちよつと疲れているだけでしょうか。でも大倭に通じると私の気力はアップするような気がするのでお手紙しました。9月5日(東光大祭)、大倭で沢山皆さんとおしゃべりしてきたいと思います。